

闘い抜くために歌われた歌——音楽を通じた人の繋がり

坂口 真康 (筑波大学大学院／共生教育学)

AMANDLA アマンドラ！ 希望の歌

(原題：Amandla! : A Revolution in Four-Part Harmony)

- ◆ 種別：DVD (ドキュメンタリー映画)
- ◆ 監督：リー・ハーシュ
- ◆ 製作年：2002年
- ◆ 製作国：南アフリカ共和国／アメリカ合衆国
- ◆ 発売元：クロックワークス
- ◆ 販売元：エイベックス・マーケティング・コミュニケーションズ
- ◆ 販売協力：エイベックス・エンタテインメント
- ◆ 税込価格：DVD ¥3,800+税
- ◆ 時間：本編 104分
- ◆ 音声：英語／アフリカーンス語／ズールー語 他
- ◆ 字幕：日本語
- ◆ 日本語字幕：伊原奈津子／夏海佑実
- ◆ 日本語字幕監修：ピーター・バラカン



© 2002 Kwela Productions LTD. All Rights Reserved.

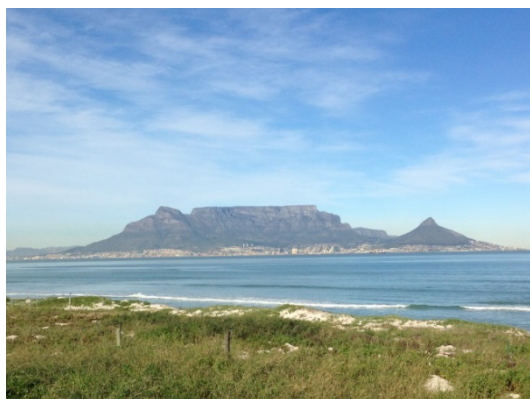
あらすじ

南アフリカ共和国 (以下、南ア) において、アパルトヘイト (人種隔離政策) に対する闘争の背後には、いつも歌があった。題名の「アマンドラ！」とは、コーサ語とズールー語で「力を！」を意味し、反アパルトヘイト運動の集会などで頻繁にかけ声として発せられた言葉である。本作品は、ひとつの国を変えた歌の力強さを、反アパルトヘイト運動に参加していた活動家やミュージシャンへのインタビューと、アパルトヘイト体制下の南アで撮られた映像をもとに、ダイナミックに描き出したドキュメンタリー映画である。

シーン再現

<リンディウェ・ズールー (自由の戦士) へのインタビュー・シーン>

ズールー：仲間が死んでも—あまり長く喪に服すと士気がくじかれる。だから戦いで死んだ仲間を葬る時—私たちは泣くかわりに歌ったの。26人の仲間を一度に埋葬した時があった。深い茂みをかき分け彼らの遺体を搜索した。葬るためにその遺体を並べた時—彼らを送る歌が自然にわきあがってきた。(ズールーが歌いだす。) *彼は逝ってしまった。英雄の中の英雄。どうか安らかに。英雄の中の英雄よ。(歌い終わってからズールーの目に涙が溢れる。)* ごめんなさい。



南ア ケープ・タウン（2013年8月筆者撮影）

音を楽しむためだけに歌が歌われるわけではない。前述のシーン再現のリンディウエ・ズルーの語りからは、アパルトヘイト体制下の南アでは、悲しみを乗り越えるために、闘いを続けるために歌が歌われた様子が読み取れる。「音楽に救われたよ。“解放の曲”だけでなくあらゆる音楽が—魂を解放してくれた」（作品中のアブドゥラー・イブラヒム（ジャズ・ピアニスト、作曲家）へのインタビュー）とされるように、南アでは、歌が盾として、自由の闘いで疲弊した人びとを守ってきたのである。

数多の闘いの中でも、1976年6月16日に起きた「ソウェト蜂起」は「反アパルトヘイト闘争史の最も痛ましい事件」（榎 2004: 182）とされる。「ソウェト蜂起」とは、南アソウェトの数千人の「黒人」生徒が中心となって、アフリカーンス語（「黒人」生徒によって抑圧者の言語とみなされていたとされる言語）で学校の教科の半分を教えようと強制する政府に対して行われた反対デモを発端とした事件である（トンプソン訳書 2009: 374）。デモ中に13歳の少年を含め多くの人が死傷したことに対する抗議運動が全国に広がる中、政府は抗議運動に対して「野蛮な」対応をとり、政府の調査委員会によれば、1977年2月までに少なくとも575人が殺害されたとされる（トンプソン訳書 2009: 374）。作中の語りを借りれば、「ソウェト蜂起」においては、「言葉のせいでは子供たちは殺されたの」（作品中のソフィー・ミグナ（歌手、女優）へのインタビュー）である。

学校という教育の場に端を発した「ソウェト蜂起」であるが、前述のズルーによると、「ソウェト蜂起」が起きた「76年以降若者の歌が作られるようになった」（作中のズルーへのインタビュー）とされる。そしてそれらの歌は、アパルトヘイト政府の武力に対抗するための武器として使われたことが指摘されている。例えば、「怒りが強すぎて学生でなんかいられなかった」と語るタンディ・モディセは、闘いの中で投獄されていたときの様子について、以下のように述べている。「彼ら〔監房で尋問や拷問を行う人たち〕は歌が嫌い。だから私は歌った。まともに闘ったら勝てない。手当たり次第に歌ってやったわ。何でもね」（作中のタンディ・モディセ（自由の戦士、'78-'88 投獄）へのインタビュー—括弧内引用者）と。学校教育を受けることを放棄し、ペンを置いた人びとは、自由への闘いのために歌という武器を手にとったのである。

アパルトヘイト闘争が激化した1980年代になると、「手りゅう弾などを持つ兵士のいる事態」が歌われるなど、「歌も軍事化」していったとされる（作中のスブシソ・ヌクマロ（活動家、DJ）へのインタビュー）。「新しい歌は危機的状況と方向性を示していた」（作中のスブシソ・ヌクマロ（活動家、DJ）へのインタビュー）とされるが、皮肉にも、アパルトヘイト政府が武装化を進めていくと同時に、歌も「武装化」されていったので

「音楽がひとつの国を変えた」

ある。被抑圧者は、抑圧者を「武力ではなく歌で怖がらせたんだ」（作中のヒュー・マセケラ（ミュージシャン）へのインタビュー）とされるが、当時の状況をアンドリアン・デ・ラ・ロサ司令官（元機動隊長）は、作中のインタビューで次のように述べている。「本当に大変だった。多くの機動隊員は18歳や19歳の若者だ。それが十万人もの叫び声や歌声—武器を振りかざす群衆と直面したんだ。後戻りは許されない。若者に限らず年配者だって—恐怖に体がこわばってたと断言できるよ」と。闘い的手段として、若者をはじめとした被抑圧者集団の人びとによって歌われた歌が、同時期の他の若者をはじめとした抑圧者集団の人びとを恐怖で震え上がらせたのである。

とはいうものの、アパルトヘイト体制下の南アにおいて、歌が単に武器や盾としてのみ使われていたわけではない。武器として歌われた歌は、一方では、反アパルトヘイト運動の中で、人びとを団結させるためにも歌われたとされる。例えば、作中のインタビューにおいてシフィソ・ヌトゥーリ（活動家、音楽プロデューサー）は、「歌は互いを分かり合う手段だった。我々がなぜ闘うか理解できない同胞とのね。彼らに政治は分からない。でも歌が終わると彼らは言った。“なぜ闘うか分かった。アパルトヘイト反対！”」と述べている。この語りにみられるように、アパルトヘイトの理不尽さを伝え、人びとを団結させるための手段としても歌が歌われたのである。そして、「歌は一つが消えるとまた次が生まれる。そうやって多くの歌が生まれた。表現したいことを数人の友と歌い。その輪が次々と広がり新しい歌になる」（作中のマナラ・マンズィーニ（自由の戦士）へのインタビュー）とされるように、南アでは闘争の中で次々と生まれた歌により、新たな人びとの繋がりが次々と生み出されていったのである。

「学校や社会、家庭などの場で行われる音楽教育は、社会における音楽と教育の多様な実際を反映して、その範囲・領域はきわめて多層的であ[り]」（例えば、目的・目標レベルにおいては、音楽そのものを目的とする立場と、音楽によって何か他の目的を達成する立場を両極に、そのバランスによってさまざまな音楽教育が存在する」（佐野 2012: 72—括弧内引用者）とされる。「音楽によって何か他の目的を達成する」という点からすると、本作品で描かれた南アの反アパルトヘイト運動の中での歌の扱われ方は、「音楽教育」としての側面も備えていたと捉えることができる。本作品の最後で、「南アの革命は唯一音楽で実現した革命だ。他に類を見ない」（作中のアブドゥラー・イブラヒム（ジャズ・ピアニスト、作曲家）へのインタビュー）とされるが、本作品で描かれた、闘い抜くために歌われた歌が発する一身震いすら覚える—力強いメッセージからは、何かに立ち向かう手段、何かから自分を守る手段、何かに対して人びとを団結させるための手段として剣よりも強いのが、必ずしもペンだけではないことを学ぶことができる。

南アでは現在でも、ストライキやデモの際には、人びとが歌い、踊っている姿が見受けられる。歌を伝達手段として人と繋がる営みは、アパルトヘイトという非常事態においてのみ取り組まれたわけではなく、現在も取り組まれている営みなのである。本作品は、そのように現在も南アで脈々と受け継がれている、対抗手段の武器として、身を守るための盾として、または人びとを団結させるための旗としての歌が、どのように生み出され、共有されてきたのかの片鱗を臨場感をもって垣間見ることができる作品である。

Information

【南アの国歌】

現在の南アの国歌には、「1994年以前の国歌であった「南アフリカの呼び声」(Die Stem van Suid-Afrika)と、アパルトヘイト反対闘争のシンボリックな歌「神よ、アフリカに祝福を(Nkosi Sikelel' iAfrika)」(楠木 2010: 75)が含まれている。「自由になれて幸運だったが我々の偉大さは一勝利後白人を血祭りに上げなかったこと」(作中のヒュー・マセケラ(ミュージシャン)へのインタビュー)という語りを象徴するかのように、現行の南アの国歌は、アパルトヘイト体制下に抑圧者集団が歌った歌と被抑圧者集団が歌った歌の2つから成り立っているのである。南アの国歌には「長い歴史の重みと人びとの願いが込められて」おり、「多民族統合国家のアマルガムとして、皆に歌い継がれていこう」(楠木 2010: 76)とされるゆえんである。とはいうものの、政府の政策批判として、国歌の後半部分をあえて歌わないといった出来事(楠木 2010: 76)が起きないわけではない。このような出来事に見られるように、アパルトヘイトを象徴する歌と反アパルトヘイト闘争を象徴する歌を組み合わせたことにより、時に人びとの間の葛藤を生み出す南アの国歌は、一筋縄ではいかない現在の南アの状況を顕著に表しているといえる。

【「南アの父」と音楽】

2013年12月5日に、ネルソン・マンデラ元南ア大統領が永い眠りについた。彼は生前、自身と音楽の関係について、以下のように述べている。「我々は人生の何年もの期間を、孤立した監獄島で過ごした。我々がその年月を過ごす中で、この都市から広まった素晴らしい音楽作品の知識と思い出から、どれだけの慰めを受けたかを他者が想像するのは困難であろう。その感情を喚起する力は、人間の魂の究極的な団結と人間の精神の不滅性を、常に我々に思い出させてくれたのである」(Nelson Mandela, edited by Sello Hatang & Sahn Venter, *Nelson Mandela By Himself: The Authorised Book of Quotations*, MacMillan in Association with PQ Blackwell., p. 170, 2011)。「南アの父」のこの言葉からも、反アパルトヘイト運動において音楽が重要な役割を演じていたことがうかがえる。

【書籍】

- ・榎泰邦『南アフリカーポスト・マンデラの行方』論創社、2004年。
- ・佐野靖「音楽教育」日本比較教育学会編『比較教育学事典』東信堂、72頁、2012年。
- ・楠瀬佳子(著)【「コラム3」国花と国歌】峯陽一(編)『南アフリカを知るための60章(エリア・スタディーズ79)』明石書店、74-76頁、2010年。
- ・レナード・トンプソン(著)宮本正興・吉國垣雄・峯陽一・鶴見直城(訳)『南アフリカの歴史【最新版】』明石書店、2009年。